

井原西鶴（一六四二～九三）の作品と日本の古典文芸との関わりについて考察した。著名な日本の古典文芸『伊勢物語』と『源氏物語』を、西鶴がどのように読み、自身の作品にその結果を反映させているのかを読み解いていく。

第一部「西鶴と『伊勢物語』」では、西鶴作品の本文と挿画に施された『伊勢物語』に由来する工夫について考察した。第一章「西鶴と芥川」では、『伊勢物語』芥川段（第六段）を踏襲する西鶴作品として、『好色一代男』「形見の水櫛」・『西鶴諸国ばなし』「面影の焼残り」・『好色五人女』「小判しらぬ休み茶屋」の三話をとりあげる。

第一章第一節では、前掲三話の分析をとおして、西鶴が芥川段をどのように解釈していたのかという、西鶴の視点について言及した。『伊勢物語』のように長い時代を経て読み継がれてきた古典文芸は、類型的な解釈が継承されていくという側面が強いが、西鶴の読み方や目の付け所には独自性がある。西鶴は芥川段の業平に、〈二条後の最後の問いかけに答えなかった男〉であるという印象を強く持っている。本節のまとめは、次の第二節にも関わってくる。

第一部第一章第二節では第一節をふまえ、芥川段の「しらたまか何ぞと人のとひしとき露とこたへて消えなましものを」の歌の解釈について、伝統的に継承されてきた読み方は芥川段の文脈に合わないものであり、その解釈には少し訂正が必要ではないかということ述べた。伝統的には、業平は〈一人残されたつらさに堪えきれないから消えたかった〉という、愛する者をなくした喪失感を主に詠んでいると解釈されている。しかし、西鶴の視点を参考にして業平詠を読み直すと、二条後の最後の問いかけに答えなかったことへの限りない後悔が一首の主眼として見えてくる。そのような視点の転換が、芥川段における描写の細部をどう解釈するかということにも影響するものであることも、あわせて述べた。

第一部第二章では、第一章でとりあげた『好色五人女』「小判しらぬ休み茶屋」と『西鶴諸国ばなし』「面影の焼残り」には、芥川段という共通点のほかに、『源氏物語』に描かれる浮舟の物語をふまえた描写がみられることを指摘した。二つの話に、なぜ『伊勢物語』芥川段と『源氏物語』〈浮舟物語〉という、ふたつの古典文芸が取り込まれているのか。その理由については、近世期には浮舟の物語に芥川段の面影を見いだすという読み方があった可能性があることを指摘した。

第二部『好色五人女』と古典文芸』では、『好色五人女』が題材とした恋愛事件のうち、巻二の樽屋おせんと巻三の大経師おさんについて言及した。『好色五人女』は貞享三年（1686）に刊行され、五巻に構成されている。そのうち巻二から巻四までは、『好色五人女』刊行と近い時期に起きた恋愛事件をとりあげており、当代性の強い作品である。そうした作品を解釈するために、題材となった事件が巷間でどのように噂されていたのか、当時の人びとの事件に対する共通認識の再現を試みた。

第二部第一章『好色五人女』巻二、樽屋おせんと大儀の虎』では、巻二の主人公である〈おせん〉が、『好色五人女』で物語化される以前から、『曾我物語』の登場人物である遊女大儀の虎のイメージが重ねられていたことを明らかにした。おせんの事件が明るみになった当時、おせんは近所に住む男に脅迫されて密通に及んだことが歌祭文でうたわれ、哀れな被害者として喧伝された存在であった。そのおせんの状況が、流行していた近松門

左衛門の浄瑠璃『世継曾我』に描かれる大磯の虎と通じるものがあったため、世間ではおせんを大磯の虎を重ねていた。その結果、歌祭文でおせんは、夫ひとすじの貞淑な妻として描かれている。また、それとは反対に、好色性の強い女であるという噂も同時に流布していた可能性を指摘した。西鶴は、〈貞淑な妻〉と〈好色性の強い女〉という、二つの相反する世間の〈おせん像〉を両方とりこみ、哄笑性を持たせながら一話を仕上げている。

第二部第二章『好色五人女』巻三、大経師おさんと女三宮』では、巻三の主人公である〈おさん〉が、『好色五人女』で物語化される以前から、『源氏物語』の登場人物である女三宮のイメージが重ねられていたことを明らかにした。おさんには、名前に「さん」がつき、密通した女であるというところに女三宮との共通点が見いだせるが、おさんの密通を伝える歌祭文「大経師おさん歌祭文」や事件に関する記録を参照すると、ほかにも女三宮と類似する点の多いことがわかる。これまで『好色五人女』巻三には『源氏物語』に由来する趣向が数多く指摘されてきたが、そうした趣向には、おさんが女三宮を連想させる女性であったという事情が関係している。また、『好色五人女』巻三の描写に、女三宮にまつわる表現があることも、数点指摘した。

付論「西鶴の総合的な本づくりについて」では、西鶴が物語を作成するにあたっては、本文だけに注意を払うのではなく、本の装丁や刊行時期までを視野に入れて作品を作りあげる視点を持っていたことを述べた。その特徴が顕著な作品は『西鶴諸国ばなし』である。

『西鶴諸国ばなし』は外題と内題で違う書名を掲載し、上方版であるにもかかわらず表紙の装丁を江戸版風に仕上げるなど、変わった趣向が多く施されている。内題「大下馬」の書名としての意味を考察することを通して、種々の趣向は〈『西鶴諸国ばなし』は江戸城の大下馬のように、多くの面白いはなしを収載する本である〉というメッセージを読者に読み取ってもらうための工夫であることを明らかにした。